

〈第141回定期演奏会〉

# Program Note

曲目解説「演奏をより深く楽しむために」

音楽評論：東条碩夫



## ウォルトン：「スピットファイア」前奏曲とフーガ

初演：1943年1月2日 リヴァプール

### 壮麗なウォルトンの映画音楽の一例

20世紀前半の英国音楽史の上で、ウィリアム・ウォルトンは、ヴォーン・ウィリアムズやブリテンとともに、ひとときわ輝く存在である。本来の彼はオーソドックスなクラシック音楽ジャンルの作曲家であり、1930年代にはオラトリオ「ベルシャザールの饗宴」や「交響曲第1番」を完成、重要な作曲家としての名声をかち得ていたのだった。だがその一方で彼は——当時の世界の名だたる作曲家たちと同じように——映画音楽の分野にも積極的に進出していた。たとえば1944年から1955年の間に作曲された、名優ローレンス・オリヴィエ監督・主演の映画「ヘンリー5世」「ハムレット」「リチャード3世」などの音楽は、よく知られているだろう。

それ以前にも、1942年に彼は、レスリー・ハワード監督・主演の映画「The First of the Few」のために音楽を書いていた。折しも第二次世界大戦の真っ只中で、映画は、英国空軍の有名な戦闘機スピットファイアの設計者ミッチェルを主人公にした物語であった。その音楽はかなりの好評だったらしく、ウォルトンはみずから

#### 作曲家プロフィール



#### ウィリアム・ウォルトン

William Walton, 1902-1983

英国オールダムに生れ、後半生に居を持ったイタリア南方のイースキア島で世を去った英国の作曲家。明快かつ力動性のある作風で人気を集めた。カンタータ「ベルシャザールの饗宴」、交響曲第1番、ジョージ6世の戴冠式のために書いた「戴冠行進曲『王冠』」、エリザベス女王戴冠式のために書いた「宝玉と王の杖」などが広く知られている。オックスフォード大など7つの大学から博士号を得たという経歴の持主。

その中から抜粋して演奏会用の編曲版をつくった。それがこの曲「『スピットファイア』前奏曲とフーガ Spitfire Prelude and Fugue」なのである。

前奏曲は、いかにも当時の映画音楽らしく、壮大でスペクタクル性を備えた楽想からなる。また「フーガ」では、クラシック音楽の作曲家としてのウォルトンの手腕が聴き取れるだろう。映画音楽がシンフォニックな響きで独自の存在感と魅力を誇っていた時代の作品である。

因みに戦闘機「スピットファイア」は、英国が1930年代半ばから開発をはじめたもので、世界大戦では英国空軍の主力機のひとつとなった。欧州の他国や米国にも供与されたが、日本の戦闘機「零戦」とは太刀打ちできないことがわかり、太平洋戦争での使用は見送られたという話もある。

#### 楽器編成

フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、バス・トロンボーン、チューバ、ティンパニ、シンバル、スネア・ドラム、鐘、ハープ、弦楽5部



## エルガー：ヴァイオリン協奏曲 口短調 op.61

初演：1910年11月10日 ロンドン

### エルガーの創作力充実期の長大な協奏曲

わが国のレコード評論界の大先達あらえびす(別名・野村胡堂)が1941年に出版した「樂聖物語」(レコード音楽社刊)に、こんなエピソードが載っている——「友人N氏が英国の商会にHMV盤の注文を発した時『……傑作集は全部送ってもらいたいが、エルガーの作品は送るに及ばない』と言ってやると、先方が……『エルガーは当代第一の作曲家である。貴下が何と仰らうと、エルガーの作品レコードは全部送るであらうぞ』と高飛車に言って来た話がある。日本人のエルガーに対する冷淡さと英国人のエルガーに対する熱心さを知るべきである……」(原文より適宜抜粋)。

こういう傾向もしかし、今は昔となった。今日のわが国では、エルガーの人気はすこぶる高い。あとで演奏される「エニグマ変奏曲」はもちろん、あの超有名な旋律を含む「威風堂々第1番」をはじめ、「第1交響曲」(1908年)、「第2交響曲」

(1911年)、「ゲロンティアスの夢」(1900年)、「チェロ協奏曲」(1919年)、「序奏とアレグロ」(1905年)などは広い層の愛好者を得ており、演奏される機会も多い。

今回演奏される「ヴァイオリン協奏曲」もそのひとつで、これはエルガー53歳(1910年)の時、彼の創作力が絶頂期に達していた時期のものであった。総譜には「ここに……の魂が籠められている」という一文が記されているが、これがまただれを指すものか、「謎」になっている。今のところは、彼の手紙などから、親しかった友人の女性アリス・ステュアート・ワートリーのことであろうというマイケル・ケネディの説が有力だが、さまざまな異説(ニューグローヴ世界音楽大事典)もある。

曲は3つの楽章からなる長大なもので、全曲にはエルガー特有の壮麗な、平穏な曲想と劇的な曲想がバランスよく交錯する。ヴァイオリンのソロは高度な技巧を聴かせるが、それがあくまで気品と風格に満ちているところが、エルガーの良さであろう。

曲は、作曲者の指揮と、有名なヴァイオリン奏者フリッツ・クライスラーのソロで初演された。

## 楽器編成

独奏ヴァイオリン、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、コントラバスーン、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、バス・トロンボーン、チューバ、ティンパニ、弦楽5部



## エルガー：「エニグマ(謎)変奏曲」 op.36

初演：1899年6月19日 ロンドン

## エルガーの名を世界に知らしめた記念作

当時42歳のエルガーは、この1作で一躍有名になったと言っても過言ではない。なにしろ、曲の内容からして話題を集めるに充分だった。14の変奏曲があり、そのひとつひとつが、友人など計14人をそれぞれスケッチしている——とエルガー自身が語っているのである。「彼らを楽しませ、自分をも楽しませるために、それぞれの特徴を描いた……だがこれは個人的な印象なので、公表する必要はない」というのが彼の説明だったが、実際はその各々(第13変奏を除く)に「C.A.E」や「E.D.U」

などの頭文字が付されていたため、のちの研究者たちによってその「謎の人物」の大半が比定されてしまったのも当然の成り行きであろう。

ともあれ、これで「謎」のひとつの大部分が消えてしまったわけだが、もうひとつの「謎」は、これもエルガー自身の「全曲を通じて、姿は現わさないが別のもっと大きな主題が隠れているのだ」という説明にある。これは解明されていないので、「謎」は残ったことになる。エルガー自身は「謎の変奏曲」とは呼ばなかったらしいが、出版譜の最初のページに印刷された「Enigma(謎)」という言葉がもとのとなり、このタイトルで広く親しまれるようになったのだった。

曲は冒頭に出る美しい主題のあとに、前述の14の変奏が続く。第1変奏の「C.A.E」はエルガー夫人のキャロライン・アリス・エルガーを指し、また最後の第14変奏の「E.D.U」はエドゥーという愛称のエドワード・エルガー自身を指すという具合である。単独でアンコール曲として取り上げられるほど有名なのは第9変奏「ニムロッドNimrod」で、友人イエーガー(ドイツ語の「狩人」)の名を旧約聖書に登場する「狩人ニムロデ」に重ねるといった凝った趣向だが、曲自体に「狩」の雰囲気はなく、多分本人の性格を描いていると思われる気品ある美しさにあふれている(注)。——かように各変奏はそれぞれの人々の人柄や個別のエピソードを作曲者自身の主観でスケッチしているわけなのだが、その当人を知らない私たちは、やはりそれらを想像して聴くか、あるいはエルガーの言うように「単なる主題と変奏」の作品として聴けばよい、ということになるだろう。

(注)「彼は主の前に力ある狩猟者であった。」

これから「主の前に力ある狩猟者ニムロデのごとし」ということわざが起った(日本聖書協会「聖書」創世記第10章)

## 楽器編成

フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、コントラバスーン、ホルン4、トランペット3、トロンボーン2、バス・トロンボーン、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、スネア・ドラム、トライアングル、オルガン、弦楽5部

## 作曲家プロフィール



## エドワード・エルガー

Edward Elgar, 1857-1934

英国・イングランドのウスター(ウスターソース発祥の地)近郊のプロードヒースに生れ、ウスターで世を去った英国音楽史上最大の作曲家のひとり。大器晩成型の作曲家で、有名になったのは42歳の「エニグマ変奏曲」からだったが、それからほぼ20年の間に多くの名作を生み出した。1920年、妻の死とともに彼の作曲意欲は低下する。保守的な作風とみなされた時期もあったが、20世紀中頃から評価は再び高まった。